

---

# 夜に融けゆく

佐木

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜に融けゆく

### 【Nコード】

N9193T

### 【作者名】

佐木

### 【あらすじ】

シングルマザーの美津子は娘と共に夜の公園である一人の男と出会う。時には雨が降り、時には月明かりが照らす夜の公園で。やがて時は過ぎ、ある法要の夜、美津子は心を決める。彼女が彼と出会う、己の想いを告げるまでの物語。

199X年、梅雨。

眠れないの。そう言った娘は熊のぬいぐるみを抱き締めて、お気に入りの毛布をずるずる引き摺りながら母親のいる居間へやってきた。時計の針は二本揃って頂点を指しており、ああ、日付が替わったんだな、と美津子に気付かせた。

「ママと一緒に寝る？」

そう聞くも、四歳の小さな子供は首を横に振る。眠れない、というより眠りたくないようだ。

明日は土曜日。保育園はお休みなので、美津子は仕方なく幼子の頭をひと撫でしてから、よっこらしよとオバサンくさい気合を入れて畳から立ち上がった。

「ちよつとだけよ？」

今はどんな我が儘でもなるべく叶えてあげたい。そう彼女は心に決めている。

例年より早い入梅がもたらす霧雨は止んでいないが、美津子は娘に沢山の力エルが散りばめられた緑のレインコートを着せて、黄色のレインブーツを履かせて、自分は大きめの蝙蝠傘を差して、細かな雨に<sup>けぶ</sup>烟る街へ足を踏み出した。

当然ながら月も出ていない夜、街灯の灯りが小糠のように舞う雲に反射して、人工の光がぼんやりと揺れている。お蔭でいつも歩く道が墨に塗り潰されたように暗く、心許ない。

美津子は娘の小さな手を己の人差し指と中指に絡ませて、静寂に支配された夜の街を、子供の歩調に合わせてゆっくりと歩いていた。てくてく。てくてく。

時々娘が水溜りを見つけてはわざとそこへ飛び込むので、派手な音を立てて水飛沫が美津子の脚を汚す。

「こら。ママ濡れちゃうでしょ」

そう言ったとしても、娘はてへへ、と笑って再び水溜りのある方へ母親を引っ張ってゆく。

ばしゃんっ。びっちゃん。

その表情を見た美津子は、漸く笑ってくれたと胸に温かな想いが兆すのを感じた。

蛇行するように静かな夜の道を歩く二人の前に、やがて毎日通っていた公園が現れた。久しぶりだねー。そう嬉しそうに話す娘の声を聞いて、言われてみればあれ以来一度も訪れていないのだと気付く。

娘が幼稚園から帰ると必ず行きかけた公園。生まれたばかりの乳飲み子の頃から訪れている場所。遊びに来なかったのはたかだか一週間ばかりのことなのに、どうしてだかひどく長い間来てないような気がする。それは多分、大きな樹に囲まれて朧げな光しか届かない人気のないこの場所が、寂しく鄙びた印象を醸し出しているからだろう。まあ、こんな雨降りの遅い時間に自分達以外に人がいたら、逆に恐ろしげではあるのだが。

そう思いながら公園に入った美津子は、己の思考の一部が当たってしまったことを知る。

公園の中ほどのベンチに誰かが座っていた。

背筋を伸ばしこちらに身体を左側を見せているその存在は、美津子と同じ大きな蝙蝠傘を差している為、顔が見えない。だがその体格から男性であることは分かった。

どうしよう。その男を見て最初に彼女が思ったことは迷いだった。雨が止まない深夜、人気のない公園でベンチに座っているだなんて変質者である可能性も高い。しかし彼女の娘は久しぶりに訪れたお気に入りの公園が余程嬉しいのか、母親の手を離して駆け出してしまっ。

「あっ！ 駄目よ！」

慌てて美津子が腕を伸ばしても、俊敏な子供は捕まらずにばしゃ

ばしゃと泥を跳ね上げ奥へ進んでゆく。そんな足音と美津子が上げた声に気付いたのか、ベンチに座っていた男がスツと立ち上がり二人がいる方向へ身体を向ける。蝙蝠傘が少し持ち上がった。

その時、美津子は己の心臓が跳ね上がったと感じた。駆け出していた娘は驚いた表情でその場に立ち止まる。だが最初に動いたのは子供の方だった。

パパだ！ そう叫んだ娘は再び駆け出し、父親にしていたようにその人物へ勢いよく飛び上がって抱き付く。

いいえ、そんな筈はない。そう叫びたかった美津子はその場に硬直して動けない。

やがて娘を抱いたその人はゆっくりとした歩調で美津子の元へやって来る。ああ、レインコートを着たままじや服を濡らしてしまうわ。そんな思いを抱えながら、彼女はその男を凝視していた。

「美津子、そろそろこの家に戻って来ない？」

相変わらずしとしとと降り続く長雨の中、車で四十分掛かる実家へ娘を連れて遊びに行けば、もう何回目か分からないほど聞かされた台詞で耳に胼胝ができた。はあ、と親にはれないよう小さく溜め息を落とし、飲み掛けていた湯呑みをテーブルに置く。

たぶんっ。押し殺す彼女の感情を表すかのように緑茶の水面が波打つ。ゆらゆらと揺れる鏡に映る自分の顔は、ここ最近老けていると美津子は思った。

「聞いているの、美津子」

苛立ちを含んだ母親の声に漸く顔を上げた彼女は、テーブルを挟んで向かい合う親へ視線を合わす。

「……聞いているわよ」

私と反比例して、肌艶がいいなあ。認めたくはないが最近の母親は生き生きとしている。しかしその原因を考えると否が応でも気分が塞いだ。

「何度も言ってるけど、実家に戻る気はないわよ？」

そしてこの口論になると更に気分が沈むのよね。内心で再び溜め息を付いた美津子を母親は睨み付ける。

「私も何度も言うけど、子持ちのシングルマザーがマンションの口インを払いながら一人で生きていくなんで、考えが甘すぎるわ」

「そうね。ただ柚希ゆずきは今の保育園にお友達が多いから、園を替えるとおの子は凄く悲しむのよ」

一人娘の柚希は共働き家庭の子供な為、乳児の頃から保育園に預けられている。お蔭で年中さんになった今では、保育園で友達と遊ぶのが楽しみでならないらしい。しかし美津子の母親はその事が気に入らない。幼稚園に入れるまでは母親が付きっ切りで子供の傍について養育するべきだ、との三歳児神話を信奉している所為だった。正社員である美津子が育児休業を終え柚希を保育園へ預けて復職する時も、それ以前に妊娠が判明した後、社則で決められた出産休暇が得られる期日まで働き続ける事も、母親は猛反対していた。あの頃の騒動は思い出したくない、と美津子は強く思う。

しかしその原因である母親は、彼女の口から「保育園」の単語が出た途端に不機嫌レベルが上昇した。

「大体ねえ、保育園に入れなくても幼稚園で十分なのよ。あんたが長い時間働き続けるから、柚希ちゃんも遅くまで保育園に残ってなきやいけないのよ。可哀相だと思わないの？」

毎回痛いところを突いてくる。台詞の後半部分は確かに美津子も、娘に対して申し訳ないと思ってるのだ。だが、

「私だって早くお迎えに行つてあげたいわ。でも今は私が働かなくちゃ誰が柚希を食べさせてくれるの？」

「だからこの家に引越してくればいいのよ。そうすればあんたの仕事が遅くなつた時でも、私が早めに迎えに行つてあげるから」

つまり母親は初孫である柚希と、もっと長い時間一緒に居たいだけなのだ。

元々美津子の母親は娘の結婚に反対していた。なので美津子が母

子世帯になった今、親子が住んでいるローン返済中のマンションを売り払い、実家に帰って同居をしないかと引つ切り無しに呼び掛けられているのだ。しかし美津子は聞く耳を持たない。

「お母さん、悪いけど私は今の土地を離れる気はないの。こうして休みの日には柚希の顔を見せに来るから、それで勘弁して？」

それに今は、あの人がいる……。彼女の脳裏に、霧雨が支配する夜の闇を纏った男の姿が浮かび上がる。その時母親が更に何か反駁しようと口を開いたのだが、孫の柚希が駆け寄ってきたので言い掛けた言葉を飲み込んだ。

「おばあちゃん！ ゆず、のどがかわいたよ〜！」

柚希は自分の事を「ゆず」と呼んでいる。眉を顰めて美津子と相対していた祖母だったが、孫の可愛らしい笑顔で瞬時に相好を崩した。

「はいはい、ゆずちゃんの好きなりんごジュースがあるわよ。ちょっと待っててね」

いそいそと冷蔵庫へ向かう彼女の背中へ、ジュースは齒に良くないからお茶にしてよ。との美津子の訴えは完璧に無視された。

\*

美津子と彼女の夫は歳が離れた夫婦だった。職場結婚であったが部署が違ったので、知り合ったのは食事会と称した簡易の見合いの席であり、それまでお互い顔も見たことはなかった。二人が出会った当時、夫は三十九歳、美津子は二十四歳。そこには十五年の開きがあった。

夫の直属の上司が未だ独身の部下の為に一肌脱いで とうるか彼にとつては余計なお世話らしかつたが その上司と親しい美津子の上司に話が伝わり、では現在独身でフリーの飯田美津子君はどうか、との話になったようだ。どこの企業にも見合いを勧めたがるお節介がいるものだ。

美津子は見合いの相手が三十九歳と聞いて当初は鼻白んだが、当日会った男を見て大変驚いた。まず顔が良い。もうすぐ不惑であるが整った顔立ちはいケメンと称しても差し支えはないと思うし、背もかなり高い。加えて彼は二人が共に勤める日本を代表する自動車メーカーの、製品開発部門のチーフエンジニアで年収も美津子の倍以上あった。

よく晴れた初冬の土曜日。ホテルの日本料理店の個室で滅多に味わう事のない会席料理を食べながら、相手が持参した釣書をしげしげと眺める美津子の胸中には疑問が渦巻いている。

触り心地からしていかにも高級品と感じる和紙の巻物には、彼の学歴・職歴・家族構成がびっしりと書かれていて、その内容を吟味すれば、正面に座る男はどう考えても結婚相手としての価値が高い自分には勿体ないぐらいだ。しかし相手は過去に同じような見合いを経験したであろうに、この歳まで独身を貫いている。美津子にはその事が最も解せなかった。何か結婚できない、又は破談にされてしまう特異な理由があったのではないだろうか？

疑惑の視線を投げ付けてしまうのをどうにか自制して、彼女は当たり障りのない話を彼と続ける。この見合いの場をセッティングしたお互いの上司二人は、昏間っから酒を酌み交わし雑談に花を咲かせて、美津子達の存在を忘れてしまったかのように盛り上がった。

やがて食事が終わり上司二人が完全に酔っ払ってくだを巻いているので、見合い相手が庭を散策しましょうか、と美津子を誘ってきた。

おお、これが定番の「後は若い二人で」ってやつね。でも彼は若いとは言えないんじゃない？ などと些か失礼な事を美津子が考えていると、スツと音もなく近付いてきた男がニコリと微笑を湛えて、彼女の傍で腰を屈めて手を差し伸べた。その男の人らしい大きな掌を見つめて美津子はぽかんと呆けてしまう。

これは何だろう？ い、いや、考えずとも「お手をどうぞ？」に



決まっている。しかしこのような行為をされた経験がない彼女にとって、素直にその手を握って立ち上がることに躊躇いを覚えてしまう。しかしいつまでも男に手を出させてその場に留めることは、恥をかかすことにもなると気付いたので、意を決して恐る恐る目の前で深く掌に己の手を添えた。

その瞬間ぐつと想像していたより強い力が加わって、美津子は無意識に立ち上がる。だが強引に引っ張るわけではなく、あくまで彼女自身が立つ時の補助になるような感じで上手く力を加える男は、こういった行為に慣れている気配がした。それでも嫌味な感じじやないわ、と美津子は思う。男の温かく大きな掌にすっぽりと包まれて、ひどく安心できる印象があった。

もしかしたらこの時、既に自分は囚われていたのかもしれない。

美津子は結婚後五年経った今でも、初めて夫と肌が触れ合った瞬間を鮮明に覚えている。そしてその感触は決して色褪せることはなく、時々彼女の視線が右手に吸い寄せられる時間を作ってしまうのだった。

\*

1999年、初夏。

今夜もしとしと雨が降り続けている。しかも七月だというのにまだ肌寒く、一度は押入れにしまった厚めの毛布を引っ張り出す破目になった。

午後十一時。幼児が就寝するにはやや遅めの時間なのに、娘の柚希は中々眠りに入ろうとしない。その理由を知っている彼女は苦笑を零して、子供の隣に己の身体を横たえた。いつも六畳の和室に娘と並んで布団を敷き、寝るまでの間絵本の読み聞かせをするのだが、案の定小さな子供は一冊読み終わっても眠ろうとしない。

お外に行きたいよ。きらきらした眼差しで見つめられると美津子に否やは言えなかった。外は寒いわよ。そんな忠告ぐらいでは幼い子供の欲求は治まるべくもない。仕方なく起きだして親子そろって身支度を整える。少し寒いので娘に暖かな上着を着せ、お気に入り緑色のカエルレインコートと黄色のレインブーツを用意し、美津子はやはり大きめの蝙蝠傘を差して夜の街へ歩を進めた。

この習慣が始まってどのくらい経つのだろう？ 彼女は娘の手を引きながらつらつらと記憶を探る。

最初は娘の不眠症からだった。怖い夢を見るから眠りたくない、と訴える娘の気を紛らわす為に夜の散歩へ連れ出した。娘がまだ赤ん坊の頃、夜泣きで中々寝付いてくれなかった時は、夫が深夜のドライブに連れて行ってくれたことを思い出したのだ。

毎日歩く街並みが夜の闇に融け、全く違う幻想的な雰囲気を感じ出す情景を、娘は興味と興奮をもって受け入れた。おまけに体力をそこそこ消費するようで、夜の散歩から帰宅すると娘は夢も見ずにぐっすりと寝てくれる。

しかし治安の良い街とはいえ全く犯罪が無い訳ではないので、本音では夜間の散歩は遠慮したいと美津子は悩んでいた。だが今では彼女の方がこの夜の散策を心待ちにしている。それは……

あつ！ いた！ 娘は公園へ入るとレインコートのフードが襟首へ落ちるのも憚らずに全力で駆け出した。ばしゃんっ！ 鮮やかな黄色を泥で汚しながら、走りにくい雨靴を履いた足を懸命に動かす。折り重なる梢の影から現れたその存在は、小さな体を軽々と抱き上げた。

おじちゃん、見つけ！ と、娘が嬉しそうに話し掛ける。今晚はこんな雨の日に散歩かい？ そう男も笑顔で応える。そんな会話が美津子が立つ位置まで届いて来ると彼女の口角は自然と持ち上がる。この数日間娘はよく笑うようになった。以前の状態に戻ったように見えて美津子には喜ばしい。

二人の元へゆっくりと近付く彼女をその人物が認めて、美津子と

同じような笑みがその顔に浮かぶ。ああ、こんな表情さえも良く似ている、と彼女は強く感じた。

己の最愛の夫に。

\*

僕は自立した女性が好きなんです。見合い相手のその人はそう言った。

美津子を園庭に誘った男はさくさくと数歩前をゆつくりと歩みながら、よく手入れされた広大な庭を眺めている風情だったのだが、小さな池のほとりで立ち止まり急にそんな事を言い出したのだ。驚いた彼女が背の高い存在を見上げると、彼は美津子をジッと澄んだ瞳で見下ろしていた。

結婚しても互いを尊敬できる関係を築きたいんです。再び見上げる彼が口を開いた。まるで美津子を諭すように、推し量るように。

突然の言葉に呆けた彼女が何も答えずにいると、彼は何を思ったのか顔を正面へ向け遠くへ視線を飛ばす。美津子はその整った容姿を横から見つめ続けた。

お金で不自由はさせませんが、できるなら妻にも働いて欲しいんです。家に閉じ籠って僕の帰りを待つだけの女性になって欲しくない。勿論対等な関係を望むからには家事は分担します。

そう淀みない口調で話す彼の横顔を見ながら、最後の台詞が「家事は手伝います」だったら自分はこの人を信じなかつただろう、と美津子は後々になって考えた。

多くの人の視線のもとで、魅力的な女ひとであつて欲しいんです。そう続けて言った男は身体ごと視線を彼女のそれと合わせた。ざりつ、と彼の足元の土が鳴る。

僕は我が儘なんで、好いた女性に甘えて欲しいし、僕自身も甘えたいんです。幾許かの照れと羞恥を含んだ男の声音が美津子の心に染み入る。この人に甘えられる程の女になれるだろうか、との不安

を抱く彼女の気持ちと相反して、男の人に甘えられたら嬉しいかも  
しれない。そう期待に胸を高鳴らせる己の不可思議な気持ちが芽生  
えた。

時々ちやぶんつと水面が波立つ小さな池のほとりで、男は続けて  
己の事を語る。女性に対する自分の望みは当の女性には中々受け入  
れられないこと。過去に受け入れてくれる女性はいたが、結婚の話  
になるとやはり寿退職をしろと言われたこと。女に甘えたい男な  
ど女々しいだけだと突き放されたこと。そのどれもが美津子にとっ  
て理解できるようで理解できなかった。

歩み寄れなかったのですか？ そう聞く彼女の言葉に彼は困惑の  
表情で答える。僕は結構頑固なんです、と。

そのちよつと子供っぽい、自分の理屈が通らないことに不貞腐れ  
るような表情に、美津子は笑った。

でも「分担」なんて言っちゃうと、子育ても「分担」ですよ？

男の人には大変じゃないですか？ そう笑いながら答えた彼女に、  
彼はひどく驚いた顔をしていた。瞳を見開いて口を半開きにして。

そのなんの飾り気もない素の表情に、自分は惹かれたんだと思う。

\*

2000X年、春。

時は過ぎ、四月。何度季節を巡ろうとも変わらず咲き誇る桜の公  
園へ、美津子は今日も深夜の散歩へ出掛ける。ここの夜桜を眺める  
ようになってもう何年経つのであろうか。最初は娘と二人で。いつ  
しか娘が夜に出歩かなくなって、今は一人で。

はらり。風もないのに時々視界を横切る薄桃色の花びらを眺めな  
がら、最早定位置となったベンチに座れば、タイミングを計ったよ  
うに夜の闇を切り離して彼が現れた。季節が移り変わって満開の桜  
が青葉となり、落葉し、雪が降り積もっても、夜の公園で彼と合わ

ない日などない。

こんばんは。美津子が座ったまま軽く頭を下げる。今晚は。その男も微笑を湛えながら挨拶を返し彼女の隣に腰を下ろす。お約束となった形式的な挨拶に二人はお約束のように笑った。ふと、彼の視線が美津子の掌に納まる封筒へ向けられる。彼女もその視線を受け止めて、ああ、と呟く。

「今日は娘の中学校の入学式だったんです」

そう言いながらその封筒を開ければ、入学式から帰ってきて大急ぎで現像した写真がたくさん出てきた。どうしても今日この日に写真を見せたいと思ったのだ。

見てもいいですか？ そう聞いてくる男の言葉に、勿論です、見ていただく為に持ってきたんですよ。と微笑んで渡せば嬉しそうに彼が写真の束を捲る。その横顔を見て美津子の心がずくりと痛んだ。いつの頃だったか、娘が深夜の散策を億劫がって出歩かなくなつたある夜、彼が、お嬢さんは元気ですか、と幾分寂しそうな表情で美津子に聞いてきた。もうその頃には彼がこの公園に来る意味を分かり切っていたから、彼女は迷わず娘の写真を手にも公園へ足を運んだ。彼の掌サイズのプリント写真には、保育園のお別れ会、小学校の入学式、運動会、学芸会、遠足、修学旅行など、事あることの彼女の成長記録が写し出されている。

子供の成長は早い。写真の中で笑う娘はどんどん大きく育ち、おさ子から少女への変容も目まぐるしく、時の流れが緩やかになる大人との差が眩しかった。

やがて全ての写真を丹念に見終わった男が、きちんと写真の角を揃えて美津子へ返してくる。ありがとうございます、柚希ちゃん、可愛くなりましたね。そう彼が目を細めて微笑みながら美津子を見つめる。いいえ、おしゃまで口の減らない子供です。きつい言葉を言い返す彼女の声はその内容に反して柔らかい。

その時、さわりと美津子の髪を優しく乱す風が吹いた。ざわざわ。花や梢がざわめく声と共に見事な桜吹雪が二人を取り囲む。彼女は

その美しいピンクの花弁が銀色にきらきら光ることを不思議に思い、ふと天を仰ぐ。と、公園の真上にこれまた見事な満月が浮かび上がっていた。満開の桜にまん丸お月様とはなんて贅沢で風流な景色だろうか。今宵は桜の名所のあちこちで花見と称した宴会が開かれている事だろう。

そうぼんやり己の思考に意識が沈んだ時、不意に隣から静かな声が立ち昇った。

「月が綺麗ですね」

呟きのような小さな声だったので、自分の聞き間違いかと彼女が隣の男を見ると、彼はどうしてだか月を見ずに美津子を見ていた。じっと見つめていた。

「……そうですね」

それ以外言いようがないので頷きながら同意を示せば、彼はにっこりと朗らかに笑った。

さわさわ。ひらひら。月光を受けた光る桜花が二人に降り掛かり、美津子の持つ写真の中の娘を彩っていた。

\*

見合い相手との初めてのデートはドライブだった。彼は当然ではあるが自社製品のSUV車で自宅近くのコンビニまで迎えに来てくれて、少し街から離れた山あいの渓谷へ紅葉狩りに行った。樹木は完全に色付いてはいないものの、紅葉や楓、銀杏が鮮やかに彩られており、紅と黄色のコントラストに緑が混じる光景は美しかった。舗装されていない砂利が多い坂道を、日頃の運動不足が祟り息を切らしながら歩く美津子へ、見合い相手はやはり大きな掌を差し出してくれる。

都会から離れた山奥は標高が高いおかげで気温が常より下がって日中も薄ら寒い。だからだろうか、その人の肌から伝わる温もりがやけに心地良いと感じるのは。ぎゅっと大きな手を握り返して男性

の力強さに縋りながら、緩やかな勾配の道をゆつくりと進む。美津子の歩調に合わせて歩いてくれる彼の気遣いに感謝しつつ、こんな穏やかな時間が流れるデートなんていつぐらいぶりだろう、と微笑かに口を開けて呼吸をしながら考えた。

実家で親と同居し通勤する毎日の中で、彼氏を作り休日はデートをする、そんな年頃の女性なら当然とも言える行為が彼女の場合は少々しづらい環境にあった。原因は美津子の母親である。男女の恋愛や結婚観において頑なな自論を持つ彼女は、恋愛とは結婚を前提として行うものであって、異性との夜間の外出は相手が婚約者でなければ認めない。などと前時代的な発想も甚だしい主張を唱え続け、美津子が思春期を迎える頃からその行動に逐一干渉を続け、彼女の恋愛に対する意欲を尽く奪ってきた。

彼女は今回の見合いの件を母親に話してはいない。恐らく母親は相手の歳が離れ過ぎていることを指摘し、必ず反対すると思うのだ。夫は三・四歳ほど年上の人が望ましい。これも母親のふざけた自論の一つであった。

だから今日も彼が家まで迎えに行くと言うのを制して、近所のコンビニで待ち合わせた程だった。それに今日は女友達と出掛けると嘘をついて外出しているの、あまり遅くない時間に戻らなくてはいけない。もう二十代の半ばに差し掛かる社会人の言葉とは思えない、と美津子は自嘲の念を抱くが、その事を彼に恐る恐る伝えればその人は笑って頷き、気にしなくて良いよと言ってくれた。彼にとつては気分の良い話ではないだろうに、嫌悪も皮肉も含まない優しいげなその微笑は、美津子の固くしこっていた心をあっさり融解する。何度目かのデートの時に彼女は、来週末は両親が旅行に行くの、とさりげなさを装って震える声で彼に伝えた。その全くさり気なくない声と態度をやはり彼は笑わず至極真面目な表情で、僕達も旅行へ行かないか、と誘ってくる。美津子は答えを迷わなかった。

その後夫となった彼はこの事を思い出しては、あれは高校生が親に内緒で外泊する時に使うテダ、と笑っていた。

\*

200X年、初夏。

「ねえお母さん。『月が綺麗ですね』って意味分かる？」

高校に進学した娘が帰宅してすぐに母親へ放った言葉は、美津子の記憶を揺さ振り、危うく手にしていた包丁を落としそうになって慌ててまな板へそれを置いた。驚愕を押し殺し平静を装いながら娘を振り返るが、己の顔が引き攣っていないか些か自信がなかった。しかし娘の方はテレビを見ながらお菓子を食べることに夢中で、母親の様子には気付いていない。美津子は胸を撫で下ろしながら娘へ声を掛ける。

「もうすぐ夕飯だからあまりお菓子を食べないのよ。で、それに何か意味があるの？」

「へっ？ ああ、今日現国の塩崎がまた脱線してさあー」

塩崎とは国語の担当教諭の名前らしい。

「柚希、塩崎先生でしょ」

「いーじゃん、学校ではちゃんと先生呼びしてるもん。でさあ、塩崎が授業中いきなり夏目漱石の話をしだして。あ、教科書に夏目漱石の話が載ってたからだろうけど。でも教科書とは全く関係ない話なんだよねー」

話す順序がばらばらだ。この子はちゃんと国語の授業を受けているのだろうか、と母親が一抹の不安を抱いた時、娘が驚くべき内容を話し出す。

「昔ね、夏目漱石が『I love you』を『月が綺麗ですね』って訳したんだって。で、塩崎が『そのココロが君達には分かりますか』って聞いてくるのよ。分かるわけないっつーの！」

娘はそれ以外にも愚痴っぽいことを喚いていたが、その辺りは美津子に全く届いていなかった。彼女の脳裏には数年前の桜が舞う月



夜での言葉が耳に響いて離れない。ああ、そういえばあの人は読書家だった。もしかしたら漱石も読んでいたのかもしれない。

だがその事を確かめるようとは思わなかった。ただ受け取った言葉に含まれる想いを胸に閉じ込め、じんわりと熱を持つ頬を誤魔化しながら包丁を再び握る。

その夜、美津子は静かな夜の街を潜り抜けて公園へ向かう。月のない暗い夜だった。

\*

見合いから三ヶ月ほど経過したある日、とうとう美津子は両親へ交際している男性がいると告白した。結婚を前提として付き合っているの。彼がお父さんとお母さんに挨拶したいって言うから会ってくれる？

突然の娘の言葉に驚きを隠せない両親であったが、相手の男の素性を聞いて、父親はいいんじゃないの、と言ってくれたが、母親は予想通り猛反対した。

歳が離れすぎている。もうすぐ四十になろう男に何故娘を嫁がせなくてはならないのか。しかも親に隠れてこそこそ交際するなんて見つともない、礼儀知らずだと激昂する。

そんな男なんて止めなさいとも言いつつ母親に、今度ばかりは美津子も負けてはいなかった。親に隠していたのは、こうやってお母さんが反対するって分かりきっていたから私が隠していたのよ。彼は最初から両親にご挨拶したいって言うてくれたし、とても誠実な人よ。そう言い返す彼女の言葉も母親は一蹴する。

女の言葉も跳ね除けられないなんて、余計情けないわ。結婚を前提にするなら、まず私達に挨拶して許しをもらってから付き合つのが基本でしょう。順番をすつ飛ばして平然と娘を傷物にするなんて、何が誠実よ。

美津子は母親の言葉に呆気にとられる。このご時勢に傷物ときた。

この家はそんなご大層な家柄だったのだろうか？ 自分はお嬢様だったのだろうか？ と彼女が時代錯誤な言葉に固まってしまうと、母親は更に勢い付いて捲し立てる。

大体そんな歳まで独身だなんて、何か人に言えない欠陥があるんじゃないの？ 病氣持ちとか。それか家族に重病人がいるとか……

その言葉は美津子の怒りを買うのに十分な侮蔑だった。彼女は今まで母親に抑圧されて積もりに積もった恨みや泣き言も解放し、突如大噴火したのだった。

それ以降、この事は決して話に上らせてはいけない実家でのタブーになっている。夫となつた彼に聞かせたくない話であると同時に、あまりにも美津子の怒りが激しかったので、流石の母親もこの事に関してはお喋りな口を閉じている。

そして美津子はこの時怒りを爆発させて意味不明な言葉を喚き散らすと、行き成り号泣して自宅を飛び出し家出してしまった。それでも行き先を恋人が一人暮らしをするアパートにした辺り、彼女も現金なものである。

涙で顔をぐしゃぐしゃにした美津子が自宅へ押し掛けてきたので動揺した恋人だったが、事の顛末を聞きだした彼は美津子を慰めて落ち着かせると、彼女を連れて自宅まで送り届けてくれた。

帰りたくないと言われ、今帰らないとこれからもつと帰りづらくなるからと恋人は説得する。そして彼女の自宅へ車を寄せて共に玄関を潜つた彼が、美津子の両親へ手を床に付いて頭を下げる様子に彼女も彼女の両親も驚いた。

申し訳ありません。僕が美津子さんとの交際を黙っていた為にこのようなご迷惑を掛けて。彼女とは結婚を前提として真面目に付き合っています。

そのような口上を述べながら床に沈む男に慌てたのは美津子の母親だった。咄嗟に父親の背中に隠れて、自分は関係ないわとでも言うように小さくなっている。その勝手な態度に再び憤然とした美津子だが、逆に落ち着き払つた父親が、まあいい機会だから中に入り

なさい、お茶でも飲もうよ。そう言って彼を部屋へ招いた。

美津子の父親は母親のように娘の恋人に対して偏見は持つておらず、穏やかな表情で彼と話をしている。だがその隣で仏頂面の母親がそつぽを向いてお茶を啜っており、美津子はその様子をイライラしながら睨み付けていて、なんとも間の悪い空間が出来上がっていた。

しかしこの小事件のお蔭で美津子と恋人の仲は認められて、彼が年齢の事もあり早めに結婚したいとの申し出を父親が受け、とんとん拍子に挙式までの話が纏まった。棚から牡丹餅である。

美津子は喜んだが、最後まで納得行かない表情で沈んでいたのは彼女の母親である。美津子が結婚して子供ができた後でも、彼女は娘の夫へよそよそしい態度を取り続けた。だから美津子がシングルマザーになった時、母親は不謹慎にも喜びを隠そうとせず、再び美津子の怒りを買うこととなった。

\*

201X年、梅雨。

やはり今日も雨が降った。どうも自分は雨女じゃないかと思うぐらい、何かの節目には雨が降っている気がした。だが、それは己の人生が激変してからだということとは理解している。

そんな事を考えつつ、漆黒のワンピースを身に纏った美津子が客用の湯呑み茶碗を洗っていると、やはり似たような黒のワンピースを着た娘が声を掛けてきた。

「お母さん、この写真だけ別にしてあるけど、どうしたの？」

洗い物の手を止めずに振り向くと、娘が今年一月に迎えた成人式の写真をひらひらと翳している。赤と黒の絞り模様の生地に金駒刺繍が美しい振袖を着た娘が、澄ました表情で写真内に納まっていた。きちんと封筒にしまっておいた筈なのにどうやってか見つけてしま

ったようだ。それを見た美津子は無言で湯呑み茶碗へ視線を戻して洗い物を続ける。娘はそんな母親を見て不思議そうな顔をした。

「もしかしてこれもあの人に見せた？ お母さん時々夜中に外出するよね。まだ続いてるんだ？」

美津子は何も答えず、ただ手を動かすのみだ。そんな彼女の背中へ娘のからかいを含んだ声が投げられる。

「ねえねえ。お母さんその人と結婚しないの？ 私もう親の再婚を気にするような年齢じゃないわよ」

その娘の言葉にひどく違和感を感じて美津子は不思議に思ったが、そういえば娘はずっと彼に会っていないことを思い出す。それこそ十年近くは彼を見ていない。だからこそその台詞だと気付いた。

ぼつと考えに耽る美津子へ娘が更に話を続ける。

「私、顔は全然覚えてないけど、お父さんとそっくりの人だよ。身代わりで選んでもいいじゃない。その人だってもう何年もお母さんと逢っているんでしょ？」

そう、もう十六年経ってしまった。年数を数えている訳ではないのに、図らずも今日の法要を親族から打診されて思い知ってしまった。もうそんなに経つのか。

美津子は洗い物を終えて自分と娘の為に新しいお茶を淹れた。緑茶の円やかな香りを嗅ぎながら湯呑みを一つ、娘へ渡して話し掛ける。

「柚希。お母さんが誰かと結婚しても構わない？」

緊張を体内に押し殺して問い掛けた。だが娘はそんな母親の様子など気付かず旨そうにお茶を啜っている。こういう能天気さが今の自分にはありがたいと美津子は思った。

湯呑みから唇を離して答える娘の声には全く翳りはない。

「さつきも言ったけど、私は平気よ？ とうかもつと早く再婚しても良かったんじゃないの？ お母さん一人でここのローンとか大変だったんじゃないの？」

己の経済状態を娘に心配されて美津子は小さな苦笑を零した。そ

して更に気付かされる。もうこんな会話を交わすほど娘は大人になつてしまったのだ。それだけの時間が経過したのだと。

「……ここはね、本当は出て行かなくてはいけなかつたんだけど、後から大丈夫になつたの。もうローンは完済しているわ」

「え！ 宝くじが当たつたとか？」

その言葉に美津子は笑つて答えなかつた。女一人で子供を抱えて、幾ら大会社の正社員とはいえ夫ほど年収があるわけでもなく、マンションのローンを払いながら子供を大学へ入れるのは並大抵の苦労ではない。しかし持ち家ならぬ持ちマンションになつたお蔭で、彼女の経済負担は一気に軽くなつた。その理由を、彼女は悲しみを持つて受け止める。

「ねえねえ、やつぱり宝くじなの？」

興味津々で話し掛けてくる娘をやはり笑つてかわし、美津子はお茶をこくりと飲む。棘のない滑らかな舌触りが彼女の口内を撥つて、ゆっくりと飲み込まれていった。

梅雨の晴れ間、と言うやつだろう。夕方までのグズついた天気とは打つて変わり、夜は雲が切れて星空が広がっている。しかも満月だ。

「月が、綺麗ですね……」

堅苦しい黒のワンピースからラフな服装に着替えて、美津子は自宅のベランダで夜の空を仰ぎながら小さく呟いてみる。銀色にも青白くにも輝く天上の光をその身に浴びて。

月が綺麗ですね。そう言った彼は真つ直ぐその瞳を美津子へと向けていた。その眼差しと言霊の裏を愛で湿らせて。

天を仰ぐ彼女はせり上がる涙を瞼をきつく閉じることで堰き止める。瞼の裏に浮かぶのはこの十六年間逢い続けた人の姿。夫と酷似した男の顔。しかし名前は聞いたことがない。どこに住んでいるのか、何をしているのかも聞かない。聞いても彼は答えられないと美津子は理解しているし、その事実を美津子が気付いていることに、

彼も気付いているから。

あの男と初めて会ったのは雨の夜だった。それから暫くの間、偶然にも雨が降っている夜しか散歩をしなかった。当初は雨の夜しか会えないなんて思い込んでいた。だから初めて星空の下で傘を差していない姿を見た時はとても驚いてしまい、それが彼女の顔に出て彼はかなり困惑していた。

そう。その時の困ったような表情は、初めて夫に会った見合いの席での顔と同じだった。ちょっと子供っぽい不貞腐れた表情。一回り以上歳が離れているとは思えない表情。

そんな風に、彼と夫が重なることはしよつちゅうある。

だがある時、娘の写真を彼に渡す際、彼の指に触れてしまい、そのあまりの冷たさに身体が跳ね上がったことがあった。ばさばさと写真が地面に零れ落ち、娘の顔が土で汚れる。そんな写真と硬直する自分へ影のある微笑を向ける彼は、何事もなく写真を拾い集めて土を払い、静かに一枚ずつ見始めた。

夫の掌はいつも温かかった。彼の指は冷たかった。そこに歴然たる違いを見出してしまい、美津子は涙を堪える事に必死だった。

ふとその時、追憶に浸る彼女の前髪を撥るそよ風に湿り気を感じて、もう少ししたら雨雲がやって来て月を隠してしまう事に気付く。ああ、月が隠れてしまふ。その前に彼と会わなくては。あの言葉を返せないじゃないか。

そう慌てた美津子は水溜りがそこかしこに残る道を小走りに駆け出し、夜の公園へ足を踏み入れる。まだ彼の姿は見えない。でも必ずいるはずだ。彼女が公園へ来て、彼が来ないことなど唯一度たりとてなかったのだから。

ざわり。湿り気を帯びた冷たい風が葉を揺らして音を立てる。風に乗って葉露が美津子の頬を掠めたが、彼女は木々が連なる暗がりを見つめ続けた。その時。

「月が綺麗ですね」

男性の低い声が背後から響いて彼女は文字通り飛び上がった。慌

てて振り向けば予想通り彼の姿。常とは違う登場の仕方に美津子は戸惑いを覚えたが、その感情をなんとか押し止め彼に言い放つ。

「そうですね。　　月が綺麗ですね」

幾分か固い口調だったが漸く言えた。娘が高校生になった年に知った言葉の意味を、やっと。

彼はそんな美津子の思い詰めた表情をじつと見つめている。男の顔からは何かを読み取ることは叶わなかったが、彼は感じるものがあったのか、口角を緩く持ち上げてフツと笑う。

「君は何かをしようとする時、気合が入り過ぎて顔に出ちゃうんだよ」

その口調は十六年間守り続けた他人行儀な敬語ではなく、美津子が焦がれ続けてきた温かみのある会話だった。漸く壁が壊れた。そう彼女は思ったが、同時にそれはこの関係が終わる時であることも示していて、己の手で終幕を引いた現実に鼻の奥が疼いた。泣き出しそうな表情の美津子に彼が二人の定位置になったベンチへ誘う。ペンキが所々剥げたそのベンチにも月光は落とされていて、艶がない筈のペンキの青色が光り輝いているような錯覚が彼女に起きる。

二人揃って腰を下ろした。彼が右側、彼女が左側。決して迷うこともない。そんな当たり前な行為も最早今夜までだと思つと美津子の胸がきりきりと絞られる。しかしそんな彼女の様子を知つてか知らずか、彼はいつもと同じ穏やかな表情で口調だけは親しげなものに変えて話し掛けてきた。

「防虫剤、かな？　君から微かに匂いがする」

くんと犬のように鼻を微かに動かして言うのだから、美津子は慌ててしまう。

「臭いますか？　今日喪服を、」

言葉に詰まった。先を続けることができなくなって彼女は彼に顔を向けたままの状態で固まる。だが隣の男は切り取った言葉の続きを口に出した。

「そうか。今日は十七回忌だね」

「ええ……」

私の馬鹿。何で彼に言わせるの。美津子は胸中で己を激しく罵った。だが唇を噛んで俯く彼女に彼は笑い掛けながら、気にしないで、と言ってくれる。暫く自己嫌悪に沈んでいた彼女だったが、これではいけないと気がつき顔を上げる。すぐに男の暗い瞳とぶつかった。「……どうして、こんな所に留まっているのよ？」

貴方が夫に生き写しの他人であればどれほど嬉しかったか。その想いを言外に含ませて非難めいた口調で美津子が吐き出せば、彼は酷く冷静な声で答える。

「君が、とても思い詰めていたから」

その言葉に彼女は膝上のスカート生地をギュツときつく握り込んだ。彼女の身体が細かく震えていることに気付いているであろう男は、噛んで含めるように慰めではない言葉を紡ぐ。

子供を道連れにする事は、子供の為じゃない。子の人生を奪う犯罪だ。遺してゆくのは可哀相だなんて親の究極のエゴでしかない……その言葉に美津子の頭がガクリと深く頂垂れて、己の握り締めた拳に視線が固定されてしまった。十六年前、彼女が囚われて逃れられなかった思考がまざまざと思い出される。

独りになった美津子には手の掛かる幼い娘と、多額のマンションのローン支払いが押し掛かった。その頃彼女の母親が同居しようと再三強引に誘ってきたので、実際に彼女はそれもいいかもしれないと一度は考えたのだが、夫の陰口を美津子と娘の前で平気で口にする母親に反発し、同居の申し出は断固として拒否した。それでも何度か口煩く誘ってきたのだが。

しかし生活は金銭的にも精神的にも苦しく、また当時は袖希が不眠症に陥ってしまいその対処にも苦慮した。仕事を休んで小児精神科にも通ったのだが、父親を失ったことによる一時的なストレスと診断され「経過を観察しましょう」と言われては美津子には何も手立てがない。

困窮する生活、娘の睡眠障害、単身の孤独感。母親からの圧迫。



美津子自身も眠れない日々が続く中で、いつしか彼女は娘を道連れにこの人生から解放されることばかりを考えていた。今思えばマンションを手放して小さなアパートにでも引っ越せば幾分か経済負担は軽くなるだろうに、当時の彼女はそんな事さえも思い付かないほど追い詰められていた。

眠れない。そう訴える娘を夜の散歩へ誘いながら、このまま暗い闇の中に消えてしまいたいと願う美津子を寸前で救ってくれたのは、彼女達を置いて行った夫と酷似した男だった。

「……あんな保険、どうして掛けておいたの？」

初めて会ったあの時、押入れの奥にある書類を探してごらん、と謎めいた言葉を言うこの人が少々気味が悪かったのだが、本当に押入れから隠すようにしまつてある保険証書がでてきて愕然とした。

美津子は己の記憶に沈む意識を引っ張り上げて、身体を起こし隣の男を見る。話が急に変わったことを大して驚いてもいない男は、苦笑をその顔に浮かべていた。

「子供は小さいし、僕はもういい歳だったからね。何かあった時君が大変だと思つて。お金が勿体ないとは思つたけど、結果として君の役に立つただろ？」

確かにそうだが、彼女にしてみればそんな「万が一の安心」より本人に居て欲しかった。言つても詮無いことと分かつてはいるが。

美津子は十六年間、夜の公園で隣に座り続けた男の顔を見つめる。十六年前に会つた時から全く変わらないその人を。

『お母さんその人と結婚しないの？』

昼間の娘の言葉が思い出される。皺一つ増えないその容姿を、白髪的一本も増えないその姿を見続けて、彼がどんな存在であるか美津子は既に理解していた。結婚などできようか。

ふと、彼女の視界に男の白い手を認める。青白い肌。血の気の無い肌。そのことがとても悲しくて、彼女は勇気を出して彼の左手をとつた。彼女の行動を見つめる彼は何も言わない。

美津子の手をすっぽりと包む大きな掌はとても冷たい。夫の手は

温かかったのにこれだけは違う。彼女は己の両手で彼の冷たい掌を挟んで熱を移してみるが、勿論こんなことをして本気で温められるとは思っていない。しかし彼の肌を感じながら、今、言わなければいけないことを震える声で静かに放つ。

「今までありがとう、あなた。私もう大丈夫よ」  
やっと、言えた。

本当はもっと早く言わなければいけない言葉を、ズルズルと今日まで引き伸ばしてしまった。娘が中学に入学したら言おう。高校に進学したら言おう。大学受験に合格したら言おう。成人式の写真を見せたら言おう……

既にもう成人式は過ぎてしまった。次は花嫁姿だけど、こればかりは永遠に見せられない場合だつてある。一体自分はこの先何年彼に甘えるつもりだろうか。もう十六年、いや、初めて会った時から二十年以上もこの人に縋ってしまったのに。

一人では、娘の両頬をキスで同時に挟むことはできないから。独りでは、娘の両手をそれぞれ握って持ち上げることもできないから。そんな言い訳を自分自身にして。でも、娘はそんなことを必要としないほど成長してしまった。

もうそろそろ、この優しい人を解放してあげるべきではないのか。いつまでも彼をこの公園に留めておくのは忍びない。

だけどそれ以上に自分はこの姿を見続けたら未来へ進むことができな。女の利己だと分かっているけれど、彼の想いを裏切つて別の人生を選びたいと思う時がある。

……でも本当はそれだけじゃない。そんな綺麗事じゃなくて。  
「ごめん」

気が付けば息が触れ合う近さに彼の顔があつた。でもその血の気の薄い白い顔は夫の顔なんかじゃない。彼は常に熱を孕んでいた。

「僕がしっかりした女性を求めてしまったから、君は強くなるうと頑張つて」

僕は自立した女性が好きなんです。互いを尊敬できる関係を築き

たい。多くの人の視線のもとで、魅力的な女であつて欲しい。僕自身も甘えたい。

初対面の見合いの日、彼に言われた言葉は知らず知らず美津子の心の頸木になつてしまつた。この人に甘えられる女になりたい。そう願う彼女は無意識に強くあると己を律する。だが元々彼女はそんな強い人間ではない。独りでは強硬な母親に抑圧されても反抗することさえできなかつた程だ。彼女が己を奮起できたのは、傍に彼がいてくれたからこそだつた。

その彼の顔が近付き、月光が遮られて美津子を大きな影が覆う。彼女が静かに瞼を閉じたのと、唇が氷を含むような冷たい口付けを受け止めたのは同時だつた。毎朝一緒に出勤する際の触れ合うだけのキスとも、夜の帳を下ろす甘やかなキスとも違う。ただただ、冷たい。

瞼を開けると、そこにはもう彼の姿はなかつた。

公園のあちこちにある水溜りが月を飲み込んでキラキラと光つていた。風が吹くたびに水面が揺れて月を崩し、木々がざわめく。でも、彼はいない。もう闇から現れることはない。美津子から別れを切り出したから。

堰き止めていた涙が噎れ声と共に決壊した。彼が座っていた位置に突つ伏して咽び泣いた。たつた今までそこに居たのに、人の温もりが感じられないその場所で。

ざわざわと樹木の擦れ合う音が、彼女の嗚咽をいつまでも包んでいた。

その後、満月が天と地を照らす日だけ美津子は夜の散策へ出掛ける。もう闇の中から現れる人はいないけれど、自らそうしたのだけれど、彼女は思い出したように月光で仄明るい公園へ足を向ける。いつまでも未練を断ち切れない己を嘲笑いながら。

だが未練は残しても、後悔はしていない。

いつものベンチに腰掛けて一人で月を仰ぐと、木々のざわめきか

ら彼の懐かしい声が訝こたまする。

君が七十歳のおばあちゃんになる時、僕は八十五歳のおじいちゃんだね。もうお互いしわくちゃになったら、歳の差なんて関係ないだろう……

そう言ってくれたのに、彼は一人だけ時間を止めてしまった。美津子が恋をした時の姿で、彼女が惚れた瞬間の姿で、永遠に。

貴方は変わらず私の傍にいたけど、私はどんどんおばあちゃんになつてゆくよ。私だけが、一人で。

老いてゆく自分を、もう彼の歳を追い越してしまった自分を見られたくない。そんな埒もない羞恥を、醜い嫉妬を覚えて引導を渡したことを、果たして女の矜持と受け止めてくれただろうか。

それとも、

「馬鹿だなあ」

といつか笑い飛ばして抱き締めてくれるだろうか。しわくちゃのおばあちゃんになつていであろう自分を。

その答えを未来で聞くことが、今の彼女の心の支えだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9193t/>

---

夜に融けゆく

2011年8月20日03時32分発行